

根底から揺さぶられた——さあどうする

森下龍浄

原子力発電・地震・津波・無明

地震とは地球の鼓動。何億年前の水河期も同じ。理不尽だがそれ自体に善悪はない。「小さい」人間のできることはやっとなごさ治山治水のみ。今回のような大津波だと逃げることしかできない。原子炉爆発はもう言語道断。国を挙げての大きかりのミスとわいい。収拾のつかない大惨事を前に悲しむことしかできないのが歯がゆい。被災地で「復興という言葉を聞くと気持ちが悪くなる」と胸の内を吐露された方もおられるようだ。「朝の来ない夜はない」「勇気を出して」等は実は刺さる言葉だと知っておくべきだ、今は。復興予算（巨額）の流用とかも報道されていて、このことに思いを致す時、復興とか癒しとか軽々に論じられるというレベルではない。

そもその原発の深層を評論家・加藤典洋氏の案内で見よう。「原子力」から「発電」へは実は純粹一直線ではなかった。重大な分岐点があった。最初の転轍機で「廃棄物・燃えカス」をどうする。「どうやら利用できるらしい」。で、「ひとまず貯蔵しておこう」となる。次が現段階の「日本の技術力なら原子爆弾の製造も可能」のレベルだ。最終段階というのは当然のこと「出来た原子爆弾をどこへ打ち込もうか」となる。もう悪魔の領域。

今回の災厄は、私共の思慮・思考・生き方を根底から揺さぶった。何百年も安眠を保証しすっかり馴染んでいた僧侶専用「枕」を剛力無双の津波が蹴飛ばしていったのである。ではこの混沌から指針らしい何かが浮上し輪郭でも見

えてくるか。ここは復興の二文字をひとまず棚上げして、信仰のあり方を再点検する今その時だと、拝受するのが正鵠ではないだろうか。「草創守文イズレガ難キ」というが、三千年とか七百年とか経ってしまい、気も緩み信仰の水位が下がり大岩礁（無明か）が顕わになったものといえる。まずはそこを手がかりとしよう。

地球の動きだから

三・一一。地球の鼓動そのもので人間から見ればそれは不条理、理不尽。だがそのことを我と我が身に射込まれた「目を覚ませの鉄槌（天罰にあらず）」と信受してみる。原発爆発はすべての崩壊の一語に尽きる。崩壊はすさまじく、日々宇宙法界を破壊しつづけて、先が見えないこと最大級。そして液状化してしまった大地。

災害の実際や周囲の人達のボランティア活動はさておき、何を学ぼう。それは過去の信仰を最深部まで目を通し、自明の事を今一度ふるいにかけるの一点と思う。もともと液状の泥沼を住みかとしている宗教、信仰といえる。「蓮華」を思えばわかる。さて、細部にこそ神は「宿る」という。僧侶目線を一旦脇に置き、我々の日常をもう一度最底辺の細目線で捉え直せるか。例えば「道下食あり」という。「道を求め」の部分がないがしろにしているという反省も必要ではないか。例えば「読経たつぷり、巻数を重ねるべし」などと囚われている自分を見つめられるか。ここを揺籃期と受け止めて振り返りを積み重ねてみよう。

震災という奇禍を奇貨にする唯一の方法がこれ。三・一一以後「いま僧侶が声を上げる」とは、自分見直しへ一歩踏み出すことだろう。

寺院崩壊

檀信徒が遠ざかっているという。どうということだろう。かつて伝道部からは「我が家の宗教」の額が配布された。

これに呼応するかのようには、檀信徒目録でいけば住職夫妻運営の家業としての寺「個人商店」と映ってはいないか。一例をあげれば寺域にて、寺院主婦と尼僧さん役僧さんを截然と分けているか。出家在家の線引きは明瞭なのか。例えば、どこかでは住職のご威光を背負って気負いに気負った寺庭婦人が年上の所化さんと呼ば捨てにする。そういう光景がありはしないか。一方、檀家へ適用する物差しは「戒名授与」を例に取ると一目瞭然、あたかも上中下か松竹梅もどき。これ、経教に照らして妥当かどうか。信徒側からの異議申し立てなどごくわずかだろうから成り立っているものの、意識ある人々には閉塞感が澁のようにたまって、仏教不信の有毒ガス供給源となることだろう。

「人々の祈る気持ちに応えていない」「仏教はこの世を苦の海と説いているではないか」「仏教は希望を説かない。仏教には期待しない。今の下降線を見ればやがて消え去る運命」「人生最後最大重要な儀式といたって所詮これだ。見せるための葬儀だね」等々の意見にもちゃんと反応していこう。

書店に並ぶ仏教書も「しきたり・儀式」に多くのページを割いている。どれもこれも暴論のような言葉だが、耳を澄ませば宗教への激越なラブコールと聞こえなくもない。捨て置くには惜しい。

宗教学法人非課税は

宗教非課税が注目され、その是非もやがて広く深く論議されよう。檀信徒も注目しはじめるだろう。「法律ですから」と言わずに、信仰の為に寺が必要と胸を張って言えるのかどうか。寺院存続・令法久住の祈りは当然だがしかし、そこに世法の匂い漂う寺院運営を「順接」できるのかどうか。教師が、仏様だけを見つめて素直に真剣に自信ある言葉で語り運営していく姿を万人は注視してくると思う。

ほとんどの教師は熱心である。だが往々にして熱心なその人も、信者の進みたい方向へ追従して先導している姿なきにしもあらず。霊魂を崇拜し遺体を拝み位牌に合掌するも信者の気に入るように、だ。本宗に所属してくれば善

しとしよう、と。「うちの和尚さんはお経上手、品行方正、柔和。檀家を大切になさる。希望に沿う説教もたまには添えてくださる。難解な教義は語らなくて結構です。政治向きの話はしないで……」これが信徒側の姿勢。そこまでの指導・教化でいいのか。

まあまあ「寺院は覺を並べて」壮观といえよう。地域に根付く・地域と連帯、寺院興隆・活性化といい、各種刊行物・パンフ・寺院便り等々を掲げての布教だが、これら対症療法も三離れ危機脱出策だとしたら、世法どっぷりではないのか。「先行投資」「営業の一環」に見えていないか。そこには、書いたつもりもないのに「檀家増が第一願望」というも大文字がパンフの上に滲み出てこないだろうか。王道を歩むことを忘れて仏祖の意にそぐわない策を弄するとしたら、その地平には電通か博報堂と提携する姿が遠望できるように気になってしかたがない。

「般若心経が最高経典」と書いてある仏教書が広く読まれていて、そんな現実を前にどこに立ってどんな姿勢で法を説いたらいいのか。何をした方がいいのか。どこから手を付けたらいいのか。まずは手始めにあのオウム信者が「遠景に押しやった」寺の屋根を再び信仰世界に取り戻したいと思う。教師の今の責務はそこにあるはず。そうして初めて「道下食あり」が現実化されると思う。仏様から「突きつけられて」ではなく、自ら選び取った結果としての「道心をコアとする衣食」だから万人も教師を仰ぎ見ずにはおれまい。法人課税は日の目を見ることなく非課税が貫徹されることになろう。

発想の転換が必要か

最高度の技術力で出発したはずの原発。今ではお手上げだとわかってしまったこのバケモノの暴走を、今度は最々高度の技術で使役するという。寺院の三離れ対策とは奇妙に似ていないか。目の前の事態打開に対症療法を採用。それでいて効果は未知数×未知数という一点で。しかもその先にどんな再生像を描き得るのか、未だ成功していないし今

後も成功し得ないだろう。対療法なんかでは。

困ったときは原点を見つめよというから、その重い声に耳を傾けてみよう。

今や多くの人がお寺を家業経営というふうに眺め、「入信大歓迎」なのに「他宗へ転宗も同宗門他寺への移籍も大反対の和尚さん」と理解しているのは間違いない。考えてみれば転宗も移籍も同列に扱わねばならないはず。「取った取られた」は時々聞くこと。仏教は変形してしまった。ここを乗り越えなければあの大切な呼びかけ「最尊最上の法華経へ入門を」の言葉は限りなく軽くなってしまう。

「個人の信仰」へのインフラ整備がぜひとも必要。当山所有の檀家という意識は檀信徒には抑圧・障害としかかっていないか、「改革」に舵を切るにはよほどの勇気が必要と思う。

だが一旦この方向へ舵を切れば「宗派内移動」が発するメッセージは檀信徒の覚醒を促し、教師の資質向上に拍車がかかり、益するところ絶大。まずはこの悩み・要請が信徒側にあるのかないのか。もしこちら側の懐の深さを疑われているとすれば、それは恥ずかしいこと。本当の信に裏打ちされた魂の交流ができたなら、必ずや周囲へ波及しないワケがない。時々刻々の一天四海皆帰妙法ではないか。そこらじゅう五十展転随喜の功德だらけ。それとは反対に、改革に蓋でもしたら「お寺さんは檀家を所有物と見ている」などとといった言葉が駆けめぐり、それこそ五十軒々裏街道まっしぐらとなりかねない。重大な岐路は今ではなからうか。教線拡大は、必ずやこの細い通路を通らねば成し遂げられないと思う。正法が滅尽してからでは遅すぎる。宗内「転寺（檀家替わり）」と転宗の関係を、腰を据えて再議論してみよう。

信仰の再構築へ向けて

いわゆる最尊最良最適のメッセージは「みんな仏になれますよ」だろうが、これが有効メッセージたり得ているか。

現下の信徒は、仏になりたい意志とてなく、目の前のささやかな幸福を求めてというのが実態だろうと見る。勿論そこに留まる人たちへこそ啓蒙としての宗教があるのだが、だからこそ「渴仰心」微弱な人へ届く言葉、他の文言を考へ出す必要を痛感する。しかしこれは難度が高い。

例えば――宗定法要式。細心の注意を払って編纂されたるうが、この中でも超慎重に扱うべきは「勸請文・回向文・言上文」あたりだと思う。法要のエキスだからである。例えば編纂会議には純粋宗学者のきびしいチェック・アドバイスが必要と思うが如何。これらの文字は文字にあらざして金言、信仰の核心部だからである。

例えば――檀研道場。「話がわかりやすく大変ためになった」の反応もあれば、「飽き足らなかつた」という人もいる。多く初心者向けになつてしまつてゐる。両方をすくい上げる方策を考えるのはとても重要。平成二十年宗門発行の「ぼくの南無妙法蓮華経」にある。忍辱を「がまんづよくやりとげる」…と。「朝夕の信仰を励む」…と。お題目を「何度も何度も」唱えるべし…と。法華経の真意が十全に伝わつたらうか。もう一度錬ろうではないか。そして対告衆を幾段階か想定して書き分けようではないか。

例えば――戒名の改革・改善。ランク付けを撤廃するということ。実現困難に見えるところだが、当山では少々の変更があつたが、あつてなく実現。完全平準化してしまつた。まずは宗内に広まることによつて広宣流布に寄与できればと願う。

例えば――地方教研で問題提起があつたとする、所の保管庫に嚴重溜め置きでもなく、一年後でもなく、すぐさま現宗研、関係者誰彼となくファックスでも流して反応すべし。統一見解としてでなく、個人として答えるべし――宗務院よ指針を示せ、と叫ぶ前に――その繰り返しが想像以上の宝を生み出す。学際的に、宗派横断的に広く会合を協議を積み重ねる。磨き上げる。きつと信仰再生へつながるだろう。

例えば――法灯明白灯明の語順が一般的のようだが、こちら自立促しの宗教であるはず。釈尊に添うて真意を伝え

よくとすれば自灯明法灯明の順番か。もしくは「自洲法洲」がいいと思うが如何。枝葉の文言いじりではない。

例えば――法器養成の事。信行道場百日延長説も聞かれる。防潮堤を上げに上げて「百メートルに」というのと似ていないか。震度九、十を想定すべし等々。子弟教育がうまくいっているとは思えない。曹洞宗では一年間というではないか、と。「三離れ」と宣伝される中、虎の子の檀家に虎の子の子弟という危機意識もヒシヒシと伝わる意見である。だが、「私のように歩いてきなさい、試みに」「きつとうまくいくよ」とおっしゃた仏祖に信従してこそ前が開けてこよう。信行道場大幅延長とかの形而下を云々するより形而上にシフトして「師の背中」での訓育あたりに活路を見出すのが王道と思う。

例えば――布教・修法・声明・社教・青年会・寺庭婦人会等々。有機的關係にあり、時間をかけ（シャツフルしても）再検討してみるのは意義あること。荒行の隆盛も手放して喜んでいいのかどうか。檀信徒が最大最尊にして唯一の修行だと思っているらしいのも悩ましい。「うちの御上人、世界一の苦行といわれる荒行を成就なさった」と。とかく修行という言葉は誤解されやすい。「ザ、修行」とでも銘打たれたら真実から遠ざかることおびたしい。苦修錬行の文言のせいだとしたら「久」修錬行の本来の語に戻したらどうか。それにしても女性バージョンの荒行堂という意見はなぜ出てこないのだろう。尼僧修法師の誕生だ。検討の価値はあると思う。メリット、デメリットを念頭にとにかく気長に会話を続けてみよう。

例えば――九識靈斷、荒行なども全宗門的に議論したら如何。会員・資格を問わず。当然ながら修法議論の場に尼僧も。この関連でいえば宗内にも靈能者があまた実在する。教師もおられよう。少々の靈感・感応道交・動物的カンとの相違点掘下げ、教学の裏付けなど全くの未着手分野ではないか。靈感と感応道交との違いがあるのに教師は大きく迂回、アプローチすらしらないのはなぜ。感応道交、それは本仏から垂らされた蜘蛛の糸であり且つ優れて修行の補助エンジンたりうるスキルでもあるはず。そういう教師・信者（依代も）への指導を如何にすべきか広く議論し、感応

道交の深奥に迫る必要がありそう。また、最尊最上の妙法蓮華經を頭頂に礼敬しながら、口には「女は業が深い」などと言っていないか。「野放しは悪い」どころか、放置すれば将来日蓮宗はガタガタになる。更に、寺院の生活態度・生活程度の無反省はやがて「無教会主義」を招来するかもしれない。

例えば――温故知新という。◎◎法難〇〇年祭。京都町衆の信仰。◎◎上人〇〇年祭。過去に学ぶは最重要なのだが、多岐多様にわたる大衆の「今の」悩みに思い致すも、最重要。「温故」は逸話・足跡・教材がそれなりに確定した評価を得ているが「知新」の方はなかなか広く大きく底知れず、骨の折れる作業。例えば「命」「平和」「人権」など大きい物語も大切だが、小さな物語の大問題もとりあげよう。「いじめ。臓器移植。出生前診断などの問題」にもアプローチを。すこぶる付きの悩ましさであるが、今の自分を賭けて「個として」発言し、議論をこそ続けるべき。医者ならぬ身、法律家ならぬ身だが、教師も生成発展しているというその姿勢を万人は見ているのではないか。覚悟して進むしかない。いったい、温故を必死に尋ね廻れば知新に至るというものではない。祖師を始め先師や高德の人士を称揚讚美・仰ぎ見るだけで終わっては怠慢のそしりを免れない。試みに祖師「三度の高名」の一つの下支えとなつている「蒙古は必ず今年」という予言を取り上げてみよう。これなど、真剣に「傾聴・共感・受容」し平成を生きる教師のこの身に発現させるという再解釈の努力なくしてどうして末輩の座に連なることができよう。

いや、教を拝受するこちらの側のこの手を不断に洗淨・更新する努力と言つていいかもしれない。高圧送電線ですら途中で何度も加圧しなければ遠くに送れないというではないか。積尊から三千年。祖師から七百年も経つて減圧減衰を指摘されている。昇圧再生の核心は革新にしかあるまい。すべてこちら側にかかっていると拝する。後を継ぐとはそういうことであると拝受する。各位の叱正を乞ひ希う。